

土器文様からみる縄文集落内の集団

いまふく りけい
今福 利恵 (山梨県埋蔵文化財センター)

はじめに

縄文時代の集落では、住居に家族を単位とした集団で生死、移住や流入などを繰り返し、こうした活動の結果が遺跡としてのこされている。遺跡にはたくさんの土器型式がみられ、縄文土器には他の個体と共通した文様構成によってまとまる一群があって、これを型式という。型式は、集団に共有された土器の設計図となる範型によってつくられた形態で、集団表象となる¹⁾。この型式=集団とみなせばひとつの集落には複数の集団がいて、さまざまに組み合わさっている。出土した土器を型式ごとに分類し、どのような組み合わせで出土したのかを検討することで縄文集落内の集団の移り変わりなど、その動態にせまってみることにする。

1 縄文集落の事象

発掘調査により竪穴住居跡から多くの縄文土器が出土する。これらの土器はそこに居住していた人たちの残したものではなく、竪穴住居が埋没していく過程で他所に居住していた人たちが廃棄したものである。竪穴住居跡の窪地となったところは、廃棄対象地となる。そこに廃棄する集団や選ばれる理由は明らかでないが、決められているものと想定できる。どこにでも廃棄できるならば、意図的に廃棄された土器がそれぞれ複数の廃棄場所で接合することが多くみられそうであるが、こうした事例はかなり少ない。ある居住者が廃棄する場所はほぼ限定されていると考えてよい。廃絶後の竪穴住居への廃棄行為の始まりは、生活にともなって必要性が生じるものと考えれば、住居がつくられ住居が始まったときとなる。新住居での生活から廃棄行為が始まり、その住居に居住しなくなったときに廃棄行為が終了する。

縄文集落全体で出土した土器をみると、ある時期の土器様式がもつべき型式すべてがそろっているわけではなく、偏りがみられるのが一般的である。集落のある時期にとうぜんあるべき土器型式が存在せずに、しばらくしてからその土器型式が存在し始め、また消えていくことがある。集落における型式変遷は、主体となって存在する型式と途中で出現・消滅する型式などの消長があり、これが集団のあり方を示している。さらに土器が住居跡から出土するばあいは、異なった複数の土器型式がいっしょになっていることが一般的であり、型式の組み合わせ関係がそこに現れている。この組み合わせは集落の通時的な変遷の中で変化し、集落内での集団の結合分離関係をみることとなる。

2 縄文集落の例題

遺跡は縄文時代中期で比較的短期間営まれ内容的にも住居跡の重複のない単純な集落を対象として山梨県八ヶ岳南麓の古林第4遺跡(第1図)²⁾を選定した。中期中葉、勝坂式期の住居跡20軒ほどの環状集落とみなされ、集落のほぼ全体が調査されている(第2図)。また住居跡どうしの重複もほとんどないため住居単位での出土遺物が明確である。時期的には、勝坂式土器の編年³⁾により詳細にみて9期の変遷にほぼおさまっている。遺跡は八ヶ岳南麓の標高867~870mの尾根状の先端に位置し、西側に甲川が南流する。住居跡配置と土坑群の群別により北群の7軒と南群の13軒の二分された住居跡から構成されると考えられている⁴⁾。

3 集落内の土器型式群の変遷

古林第4遺跡にみられる土器型式は、勝坂式土器の初期から末期までの9期の変遷がみられる(第3図)。主たる型式は、抽象文土器、重三角区画文土器、パネル文土器、シャンパーハットパネル文土器、縄文系土器、W字文土器、楕円区画文土器、人体文土器、櫛形文土器である。勝坂式土器全体でみればいくつか型式が欠落しており偏りがみられる。なお各型式において文様帯の有無や主文様の形態、器形などによりさらに細分類できる。

古林第4遺跡で1期(貉沢式期)には抽象文土器のみが特徴的にみられるが2期(新道式期)までで、3期(藤内1)には墓塚からの出土となって以後はみられなくなる。この集落の開始時にみられるがすぐに断絶してしまう。第3期には型式が一気に増加し、重三角区画文土器に加え、文様構成が異なる各種のパネル文系土器、縄文系土



器がこの段階から出現し始める。第4期(藤内2)ではW字状文土器が出現し、第5期(藤内3)で頸部楕円区画文土器が、第6期(藤内4)で、人体文土器が加わる。第7期(井戸尻1)に最も型式数が多くなるが、第8期(井戸尻2)では、多くの型式が消失し、第9期(井戸尻3)では人体文土器、櫛形文土器、縄文系土器のみとなって集落は終焉を迎える。

4 型式の変遷と集落内での分布

古林第4遺跡にはいくつかの型式があってそれぞれ特徴的な展開をみせている⁵⁾が、ここではパネル文土器と楕円区画文土器の2型式にしぼってみていくことにする。

パネル文土器(第4図上)は、型式において文様構成からFGHIの4つの細型式に分けられる。第3期に出現し、第4期に4つの細型式がそろうものの5期、6期には衰退する。出土した住居跡単位でみていく(第4図下)と、第3期には3軒の住居跡にみられ、1軒でGHIの各細型式が共存し、それぞれ1軒にG、H型式が出土する。第4期には全5軒の出土があり、そのうち2軒は第3期から継続し、他3軒が新規の住居となる。継続する1軒と新規1軒に同じ組合せのG・H型式がみられ、これに新しいF型式が加わる組み合わせとなる。住居3軒にG型式とI型式がそれぞれ単独でみられる。第5期ではF型式が1軒に集約され、第6期にも1軒で継続していく。住居跡配置でみる(第4図中)と第3期には北側の1軒と南側2軒に分布する。南の1軒がGHI型式との組合せを持ち、中心的な位置にある。第4期ではこの中心的な住居跡から北と隣接する南のそれぞれ1軒にF、G型式が移動し、さらに北の別の1軒に単独I型式が移る。逆に前の時期に北にあった1軒は南の1軒へ移る。第5期になると南の新たな1軒に集約され、第6期でも南の新しい1軒へ移っている。パネル文土器の動きは、初めは南に拠点を置いて北にも広がっているが、次期には見かけは同じだが南から北へ、北は南へと住居跡が逆転する。以後は南へ移り、わずかに継続し続けている。

楕円区画文土器(第5図)は、胴部に楕円形区画文がめぐる一群で、MNOの細型式に分類できる。いずれも量が少なく主流型式になりえていない。第5期~第7期の3段階の変遷となり、M型式が継続的にみられO型式、N型式の細型式が順次追加されていく。住居跡は各期で継続されず、新規に展開していて、1軒だったのが第7期には型式の増加とともに4軒が増える。O型式は途中でM型式といっしょになるが、すぐに新しいN型式と別の1軒でいっしょになる。住居配置ではM型式の1軒は時期ごとに北側へ移動していき、最後には新しいN型式が南北に広く分散している。O型式はほぼ中央付近にとどまっている。それぞれの細型式毎に展開が異なったあり方を示しているのがわかる。

まとめ

型式ごとの動態をみてみたが、さらに住居跡出土による多型式の組み合わせという視点もまた必要になってくる。これは異集団との結合・分裂を意味し、状況はかなり複雑になってくる。土器を型式分類してその展開をみると型式の並行、また新型式の追加、消滅が起こり、こうした動態が住居跡という遺構で組み合わせとなって反映されている。これらは総じてこの集落に居住した人々の動きであり、その累積結果である。これまで縄文集落の分析の中で住居を基本的な単位としてきたが、土器型式からみれば住居単位を分解されなければならず、そこには複数の単位集団から構成されていることを知る。土器型式による集落分析では住居は集団の単位とはなりえないものとなる。そして住居単位での組み合わせとなる型式群は常に一定でなく追加、分裂、消失を繰り返しているのである。土器型式から集落を探ることでそこに暮らしていた人たちの動向がみてとれるのがわかる。

1 小林達雄 1977「型式、様式、形式」『縄文土器 日本原始美術大系1』講談社

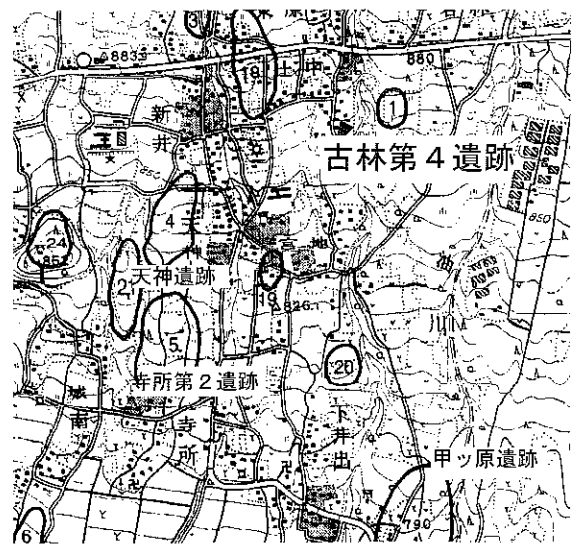
2 大泉村教育委員会 1999『古林第4遺跡I(石器編)』、2002『古林第4遺跡II』

3 今福利恵 2011『縄文土器の文様生成構造の研究』アム・プロモーション

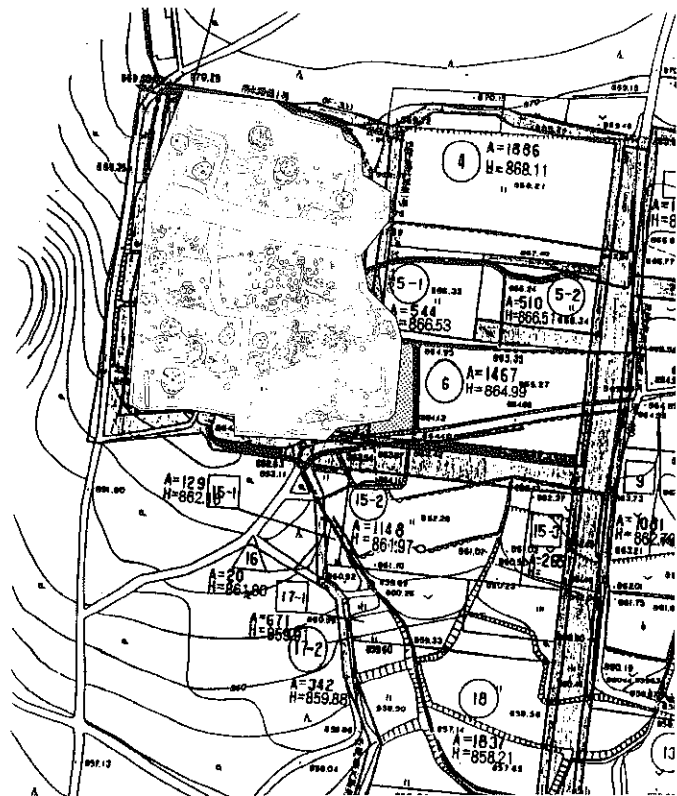
4 伊藤公明 2006「古林第4遺跡」『縄文集落を分析する 2006年度研究会資料集』山梨県考古学協会

5 今福利恵 2014「山梨県北杜市古林第4遺跡における縄文集落分析」『研究紀要』30 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

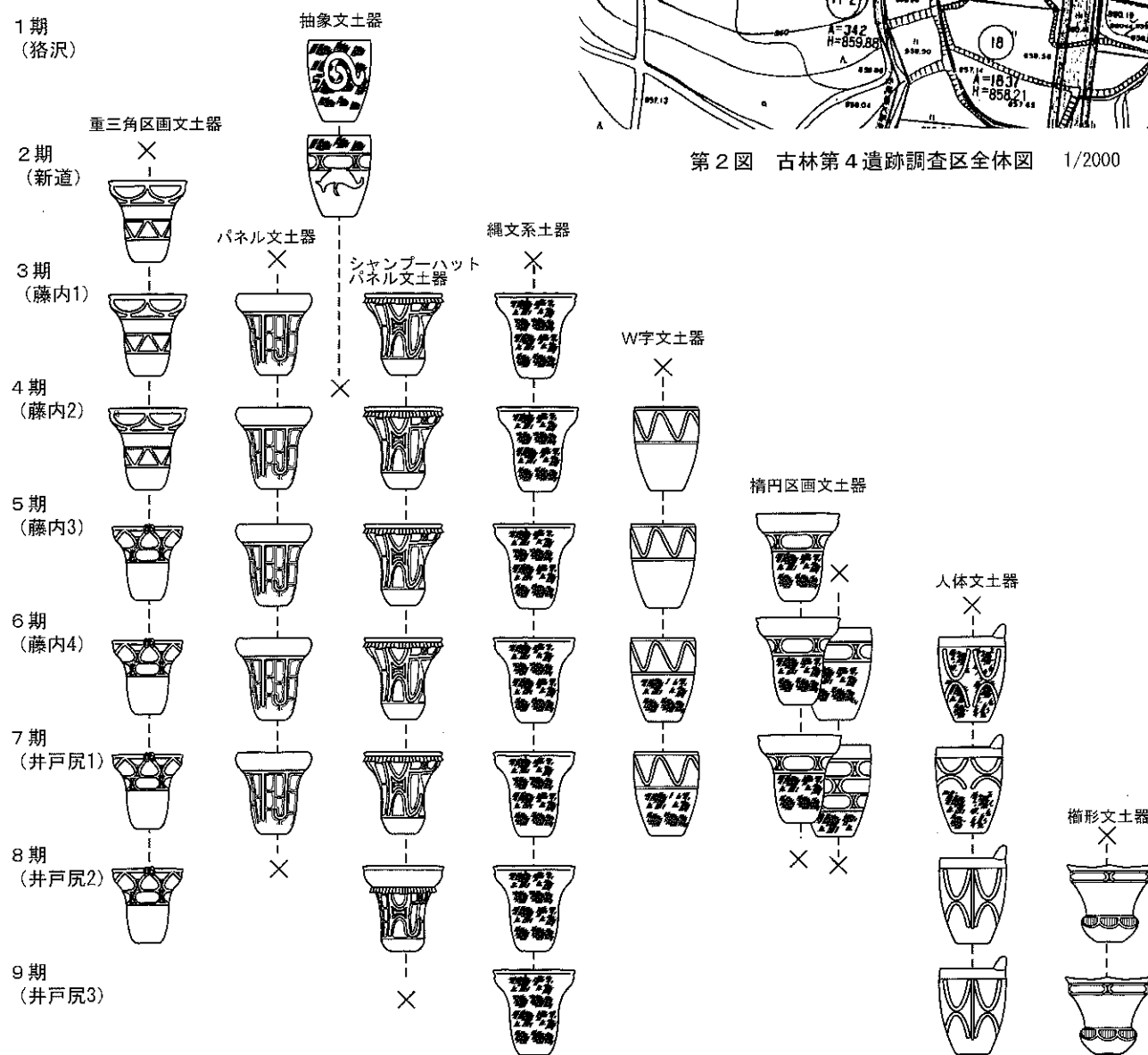




第1図 古林第4遺跡位置図



第2図 古林第4遺跡調査区全体図 1/2000



第3図 古林第4遺跡の土器型式変遷



パネル文土器
3期 (藤内1)

G口縁有文

Hパネル無口縁無文

I 胴部文様

4期 (藤内2)

F口縁無文

5期 (藤内3)

6期 (藤内4)

3期 (藤内1)

4期 (藤内2)

5期 (藤内3)

6期 (藤内4)

楕円区画文土器

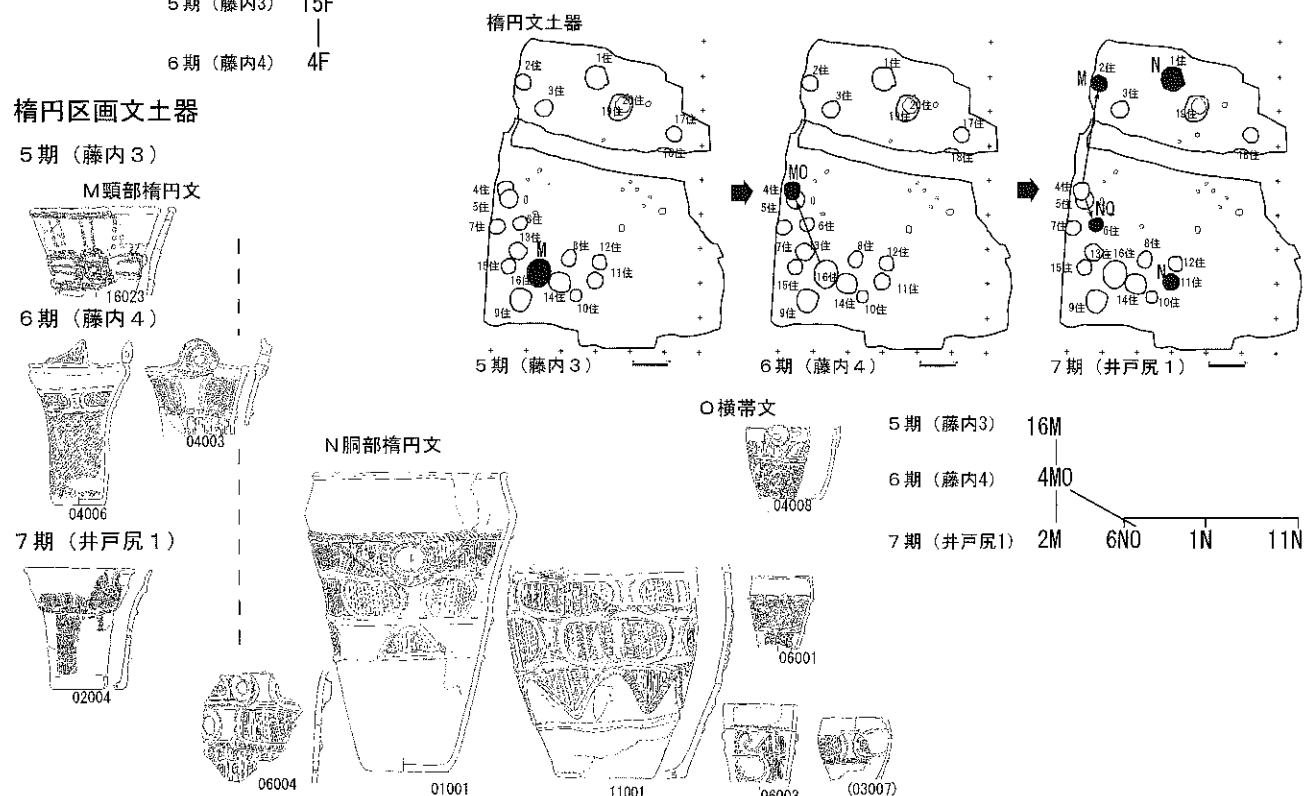
5期 (藤内3)

M頸部楕円文

6期 (藤内4)

7期 (井戸尻1)

第4図 パネル文土器の系統変遷と出土場所



第5図 楕円区画文土器の系統変遷と出土場所

